

## 古英語 -man 複合語の形成

著者	藤原 保明
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	47
ページ	69-87
発行年	2005-03-31
その他のタイトル	On the Formation of -man Compounds in Old English
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/9794">http://hdl.handle.net/2241/9794</a>

## 古英語 -man 複合語の形成

藤原保明

### 0. はじめに

Man を主要部語 (head word) とする複合語 (以下, -man 複合語<sup>1)</sup>) は古くからゲルマン諸語に見られ, 英語においても, 古英語以来, 生産的な複合語の典型となっている<sup>2)</sup>。すなわち, 古英語で108例用いられていた -man 複合語は現代英語では499例に増加しているが<sup>3)</sup>, このうち今日でも用いられているのは *almsman*, *chapman*, *foeman* など, 20例にすぎない<sup>4)</sup>。すなわち, 古英語の -man 複合語の大半は中英語期以降に廃用となり, 479例の -man 複合語が新たに形成されたことになる。しかしながら, 古英語の -man 複合語は, i) man を限定する語 (以下, 限定語) と同義となる例がかなりあること, ii) 動作主 (agent) を表す接辞 (-a, -ere, -end) 付加語と意味的に競合する例が多いこと, iii) 限定語の品詞や種類は現代英語の場合とかなり異なることなど, 興味深い言語特徴を示す。そこで, 本稿では主として語形成の観点から古英語の -man 複合語の言語特性を明らかにしたい。

### 1. 古英語の -man 複合語の言語特徴

#### 1.1. 古英語の man の形式と用法

古英語の man は男性普通名詞であり, 一般に「人, 人類, 人間, 男」の意味で用いられる。この man は *and* 'and' などの場合と同様, 鼻子音の前で高めの異音 [á] をもつことがあり, *mon* という形式で表される。たとえば, *Beowulf* では, 一般的な man に対して, この異形は約38%の頻度 (すなわち, 9例の *men* を除く65例中の17例) で用いられている。一方, 末尾の子音が重複する *mann* という形式は Clark Hall & Meritt (1966, 以下 C & M), Bosworth & Toller (1898, 1921, 以下, B & T) は名詞に用い, 不定代名詞の man と

区別しているが、Holthausen (1963) は *mann* のみを認め、用法も名詞に限っている。ちなみに、*Beowulf* では屈折語尾を伴う場合は *mannes*, *mannon*, *manna* のようにすべて重子音が生じるが、その他の場合には、単数・与格形の *menn* の 1 例 (1.2189) を除いてすべて単一の *n* で終わる。さらに、古英語の *man* と *mann* は意味の対立を引き起こすことはない。これらの事実から判断して、本稿では *mann* は *man* の異形とみなし、特に必要でない限り、両者を区別しない。

## 1.2. 古英語の *man* の意味と文法化

Klaeber (1950: 376) は、一種の不定代名詞として用いられた *man* の主格・単数形の例として、‘one, they’ の意味では 3 例 (1172, 1175, 2355), ‘any one’ の意味では 3 例 (25, 1048, 1534) をあげている。Klaeber は「一種の」(a kind of) と述べ、断定は避けているが、*man* が不定代名詞であるとしたら、他の代名詞と同様、*man* も言語強勢を担うことなく、韻文では頭韻に関与しないはずである。そこで、ここで *man* の語彙上の資格を明確にしておきたい。Klaeber が一種の不定代名詞とみなしている *man* は、(1 a, b) の例では頭韻上の優先位置にあるにもかかわらず頭韻していない<sup>5)</sup>。このことから判断すると、これらの *man* は言語強勢を有しない不定代名詞であるとみなせる<sup>6)</sup>。しかしながら、他の 4 例 (すなわち、‘one’ を意味する 1 例と ‘any one’ として用いられている 3 例) は (1 c) のようにすべての例において頭韻に加わっている。一方、名詞の *man* ‘man’ は、一般に強勢を有し、頭韻の資格がある。それにもかかわらず、(1 d, e) のように頭韻しないことがある。すなわち、異形と屈折形を含めた *man* の例は *Beowulf* では合計 65 あるが、このうちの 6 例は頭韻可能な位置にあるものの、頭韻には加わっていない。ちなみに、この詩の場合、*man* 以外の名詞が頭韻上の優先位置にあっても頭韻しない例は皆無ではない。このような事実から判断すると、この詩に関する限り、名詞の *man* が、たとえ一部の例であっても、不定代名詞へと文法化していたと断定することはできない。

(1) a. Me man sægde, / þæt þu ðe for sunu wolde (1175)

‘Someone said to me that you would (have this warrior) as a son’

b. hondgemot[al], / þær mon Hygelac sloh (2355)

‘of hand-to-hand struggles, where someone slew Hygelac’

c. mildum wordum, / swa sceal man don (1172)

- 'with kind words, as one shall do'
- d. - he is manna gehygd - / hord openian (3056)  
 ' - He is the protector of men - open the hoard'
- e. þæt mon his winedryhten / wordum herge (3175)  
 'that people shall praise his friendly ruler in words'

## 2. 古英語の -man 複合語の言語特徴

### 2.1. 古英語の -man 複合語が限定語と同義となる場合

古英語の -man 複合語の最も注目すべき点は、限定語と同義となる例がかなり多く、全体の約4分の1（すなわち、108例中の26例=24.08%）がこの特徴を示していることである。古英語の場合、複合語は一般に散文よりも韻文に多く用いられている。この理由には、主要部語に限定語を付加することによって頭韻とリズムの必要がまかなえること、同義語が作りやすいことなどがある。ところが、今回分析したところ、一般的な傾向とは全く異なり、-man 複合語の使用は古英詩では敬遠されていることが明らかとなった。すなわち、26例の -man 複合語のうち（2c）にあげた18例は、対応する限定語が古英詩で用いられているが<sup>2)</sup>、この限定語が man と複合した例は古英詩全体で ealdor-mann, hago-steald-man, wæpned-mann, wif-mann の4例にすぎない<sup>3)</sup>。それでは、限定語が -man と複合すると、古英詩での生起頻度がどうしてこのように激減するのであろうか。ここでその理由について考察しておきたい。最初に、（2a）の5例の場合、限定語の æht, ænig, carl, dry, heafod はいずれも「(～の) 人」を表すが、「人」以外の意味も表すことから、man を伴うことによって、どういう「人」であるかをより明確に示すことができる。一方、（2b）の3例の場合、限定語が形容詞であれば、「形容詞+名詞」から成る一般的な複合語と同等に扱える。しかし、これらの3例の限定語を名詞ではなくて形容詞とみなすためには、その根拠を提示せねばならない。この議論は2.2.4. に譲る。残る（2c）の18例の場合、限定語が man と複合している理由ははっきりしない。そこで、26例の大半の man が限定語と複合する理由を探るために、26例を韻律の観点から考察してみる。

- (2) a. æhte-mann 'farmer, serf' (<æht *f.* 'lands, serf, cattle, goods, wealth') ;  
ænig-mon 'any one, some one' (<ænig 'any, any one') ;  
carl-mann 'male, man' (<carl *m.* 'man' <ON karl cf. carl-fugol *m.* 'male bird,

- cook' ); dry-mann 'sorcerer, magician' (<dry *m.* 'magician, sorcerer, sorcery' ); heafod-mann 'headman, captain' (<heafod *n.* 'head, source, origin, chief, leader' )
- b. cristen-mann 'a Christian' (<cristen *adj.* 'Christian' ; *m.* 'Christian' ); sot-man 'foolish man' (<sott *aj.* 'foolish, dull, stupid' ; *m.* 'fool, dullard' ); wæpned-mann 'male, man' (<wæpned *adj.* 'male' ; *m.* 'male person' )
- c. æwda-mann 'witness, compurgator' (<æwda=æw-da *m.* 'witness, compurgator' ); burh-warū-mann 'burgess' (<burh-warū 'inhabitants of a *burg*, burghers, citizens' ); ceorl-man 'freeman' (<ceorl *m.* 'churl, layman, peasant, noble man' ); dryht-ealdor-man 'bridesman' (<dryht-ealdor *m.* 'bridesman' ); ealdor-mann 'alder-man, ruler, prince, chief' (<ealdor *m.* 'elder, chief, lord, prince, king' ); fah-mann 'foeman, object of a bloodfeud' (<fah *m.* 'foe, enemy, party to a bloodfeud' ); hago-steald-man 'bachelor, warrior' (<hago-steald *m.* 'bachelor, young man' ); heah-ealdor-mann 'ruler, patrician' (<heah-ealdor *m.* 'ruler, patrician' ); hierde-man 'shepherd' (<hierde *m.* 'shperd, herdsman, guardian, keeper' ); lad-rinc-man 'conductor, escort' (<lad-rinc ? *m.* 'conductor, escort' ); mægden-mann 'maid, virgin' (<mægden *n.* 'maiden, virgin, girl, maid, servant' ); mægð-mann 'maiden, virgin' (<mægð *f.* 'maiden, virgin, girl, woman, wife' ); ðening-mann 'serving-man' (<\*ðening <ðegn *m.* 'servant, minister, follower' ); ðeof-mann 'robber, brigand' (<ðeof *m.* 'thief, criminal, robber' ); ðeof-mann 'servant' (<ðeof *f., m.* 'servant, slave' ); ðusend-ealdor-man 'captain of a thousand men' (<ðusend-ealdor *m.* 'captain of a thousand men' ); weard-mann 'watchman, guard, patrol' (<weard *m.* 'keeper, watchman, guard, guardian' ); wif-mann 'woman, female servant' (<wif *n.* 'wife, woman, female, lady' )

古英詩で用いられている -man 複合語は上で述べたとおり ealdor-mann を含む4語のみである。最初に, ealdor-mann は古英詩全体で12例用いられているが (Bessinger & Smith 1978 : 238), このうちの9例は *Paris Psalter* で用いられている。この詩の特異性は ealdor-mann の使用頻度だけでも窺える

が、ゲルマン古詩の韻律の伝統に基づいていない作品であることから、これまでと同様、本稿においても他の作品と同列には扱わず、分析対象から外す。したがって、残る3例を分析すればよいことになる。まず、(3a, b)の場合、第一半行は man がなければ3音節となり、伝統的韻律論では不完全行となることから、これらの半行では -man 複合語はリズム上不可欠であるとみなせるが、(3c)の場合、第一半行の man はなくともリズム上問題は生じない。したがって、ealdor は man と複合しなければ、半行のリズムに支障をきたすとは限らない。

(3) a. wis ealdor-man, / woruldgesælig (*The Battle of Maldon* 219)

'a wise alderman, prosperous in the world'

b. ond ealdor-menn / æht besæton (*Andreas* 608)

'and noblemen held council'

c. Wiste he ealdor-men / in unrihtum (*Daniel* 684)

'he knew the leaders in the evils'

次に, hago-steald-man, wæpned-mann, wif-mann の場合, man が付加されなくても, (4a, b) では頭韻またはリズムに支障が出ないが, man は (4c~e) では頭韻とリズム上不可欠なものとなっている。古英詩から抽出できるのは(3)と(4)の4例がすべてであり, 絶対数が乏しいが, これらの例からあえて一般化を引き出すとなると, 「当時の詩人にとって, 主要部語の man は韻律上必要不可欠とは限らなかった」ということになろう。もっとも, (4a, b) のような例の -man は, 当時の詩人が韻律以外に不可欠であると認識していた証拠となる可能性もある。しかし, その必要性は具体的に何であったかは現時点では不明である。ちなみに, 現代英語の woman は古英語の wif-man に由来するが, この語が古英詩全体で用いられているのは (4b, e) の2例のみであり, しかもこの2例は *The Descent into Hell* という短編詩に限られ, 他の古英詩では「女(性)」はすべて wif 'wife' で表されている。これらの事実から, wif-man を含む -man 複合語が限定語と同義であるなら, なぜ古英詩で重用されないのかという疑問が出てくるが, この疑問を解く鍵は散文での用例に求めざるをえない。なお, *OED* (s. v. Woman, I. 1.) によると, wif-man の初出は893年頃の Ælfred の *Orosius* であるが, Krapp & Dobbie (1936: lxiii) は *The Descent into Hell* の成立時期を8世紀末か9世紀初頭とみなしていることから, この年代推定を根拠にすると, (4b, e) の2例は *Orosius* より1世紀ほど古いことになる。

- (4) a. **geong hago-steald-mon / golde ond sylfore** (*Riddles* 14.2)  
 ‘young warrior (covers me) with gold and silver’
- b. **wiston þa wif-menn, / þa hy on weg cyrdon!** (*The Descent into Hell* 16)  
 ‘the women had then been aware of (some other thing about it), when they came back!’
- c. **wig-gryre wifes / be wæpned-men** (*Beowulf* 1284)  
 ‘the war-terror of a woman in comparison with a man’
- d. **Wend þe from wynne : / þu scealt wæpned-men** (*Genesis A* 919)  
 ‘Turn yourself from pleasure! You shall (be under the power) of men’
- e. **witgena werod, / wif-monna þreat** (*The Descent into Hell* 48)  
 ‘a multitude of prophets, a host of women’

-man 複合語が限定語と同義となる (2) のような例は、すでに述べたとおり、108例中26例にすぎず、大多数の例では -man 複合語は限定語と同義ではない。そこで、今度は古英詩で用いられているこの種の -man 複合語の特徴を韻律の観点から探ってみる。ここでは *Beowulf* で用いられている6例の -man 複合語を対象にするが、このうちの1例は (4c) ですすでに考察したことから、残る (5) の5例を以下で分析する。(5) の例のすべてにおいて、第一、第二という半行の区別に関わらず、-man 複合語はすべて頭韻に関与している。さらに、(5a~c) では -man 複合語はリズム上も不可欠であることが分かる<sup>9)</sup>。したがって、(4c) の1例を合わせると、*Beowulf* では6例の -man 複合語はすべて韻律上不可欠であることが分かる。-man 複合語は (3), (4), (5) を合わせても13例にすぎないことから、もっと多くの例を対象にすれば、-man 複合語と韻律の関係は一般化できるであろう。

- (5) a. **gleo-mannes gyd. / Gamen eft astah** (1160)  
 ‘the song of minstrel. Joy arose again’
- b. **golde gegyrede / gum-manna fela** (1028)  
 ‘many men adorned with gold’
- c. **Com þa to lande / lid-manna helm** (1623)  
 ‘Then the protector of seamen came to land’
- d. **sæ-manna searo / samod ætgædere** (329)  
 ‘the armour of seamen all together’

- e. þæt he sæ-mannum / onsacan mihte (2954)  
 'that he could refuse sea-men'

## 2.2. 古英語の -man 複合語の型

この節では、古英語の -man 複合語の言語特徴を探るための1つの手がかりとして、Marchand (1969) の複合名詞の分類を参考に -man 複合語を分析したい。Marchand (1969: 6-82) は現代英語の複合名詞を構成素の品詞や語尾の区別に応じて13の型に分類しているが、この分類基準を古英語の -man 複合語に適用すると、(6) のようにわずか5つの型に限られることが明らかとなった。

- (6) a. Type 1: 名詞+man: brim-man 'sailor', heafod-mann 'captain', scol-mann 'scholar'  
 b. Type 2: 形容詞+man: dwol-man 'heretic', Englisc-man 'Englishman', freo-man 'freeman'  
 c. Type 3: 名詞の屈折形+man: æhte-mann 'farmer', liðs-mann 'seafarer', ripe-mann 'reaper'  
 d. Type 4: -ing/-ung を伴う名詞+man: hiering-man 'subject', leorning-man 'learner'  
 e. Type 5: 副詞+man: forð-man 'man of rank', geo-man 'man of past times'

5つの型の中で注目には値するのは、まず第一に、man が名詞によって限定される Type 1 が108例中73例 (=67.59%) あり、大多数を占めていることである。ちなみに、Cristen 'Christian', freols 'freedom, free', healf 'half' のように、限定語が名詞か形容詞か区別しにくい例が7つある<sup>10</sup>。したがって、これらの例が名詞とみなされれば、該当例はさらに増え、全体の81例 (=75%) を占めることになる。第二に、形容詞が man を限定する Type 2 は6例のみである。仮に、上述の8例をすべてこの型に含めたとしても、合計14例であり、全体の12.96%を占めるにすぎない。屈折語尾を伴う Type 3 は10例、抽象名詞を派生する接尾辞 -ing または -ung を伴う Type 4 は6例ある。一方、現代英語には存在しない副詞+man という Type 5 は2例あるが、限定語が形容詞か副詞か区別しにくい3例 (neah 'near', Norð 'northern, in the north', suð 'southern, in the south') をこの型に含めるとすれば合計5例となる。この3例を形容詞とみなせば、Type 2 は17例 (15.74%) に増えることになる。



以上のように、古英語の *-man* 複合語の限定語は7割前後の例において名詞が占めていることが今回の分析によって明らかとなったが、この情報だけでは *-man* 複合語の特徴を解明することはできない。そこで、次の節では、*-man* 複合語と同義語として競合することが多い *-a*, *-ere*, *-end* が付加された語を引き合いに出して、*-man* 複合語の言語特徴を解明したい。

### 2.3. 動作主名詞と *-man* 複合語の競合

古英語の動作主を表す名詞の大半は *-a*, *-ere*, *-end* という接尾辞を付加することによって作られるが、*-man* 複合語にも動作主を表す語がかなり含まれていて、しかもこれらの接辞付加語と競合する場合が少なくない。その一方で、4種類の動作主名詞がすべて競合する例は全く見当たらないことから、これらの接辞が付加された語と *-man* 複合の間には何らかの制約が存在していた可能性がある。そこで、以下の節では動作主名詞の形成という観点から *-man* 複合語を分析したい。ここで「動作主名詞」の定義を明確にしておかねばならない。動作主名詞は動作の主体を表す名詞であり、現代英語の場合には動作を示す動詞の語根に動作主を表す接尾辞 (*-er*, *-or*, *-ar*, *-ist*, *-ent*, など) を付加して作られる。一方、古英語の場合、動詞は一般に名詞の語根に接尾辞 *-(i)an* を付加して作られることから、動作主名詞を作るには名詞の語根に *-a*, *-ere*, *-end* を付加すればよく、動詞の語尾を取ってから名詞を派生する接尾辞を付加するのではない。ちなみに、動作主名詞の「動作」の意味は、単に「～する者」ではなく、「職業として～する」、「特殊な状況において(一時的に)～する者」のことである(荒木・安井, 1992: 64)。

#### 2.3.1. *-man* 複合語が *-a* 付加語と競合する場合

最初に、*-man* 複合語が *-a* 付加語と競合する(7)のような例は11あり、*-man* 複合語が3種類の接辞付加語の中では最も数が多くなっている。これは、*-a* 付加語が *-ere* や *-end* 付加語よりも例が圧倒的に多いことから必然的に生じたものであり、特に注目するには当たらない。興味深いのは、*-man* 複合語が(7a~c)の *dwol-a*, *feð-a*, *flot-a* と競合する場合である。すなわち、これらの例は、(7a)の *dwol-a* は 'error, heresy', (7b)の *feð-a* は 'band of foot-soldiers, troop', (7c)の *flot-a* は 'boat, ship, vessel, fleet' のように、「人」以外の意味も表すが、(7d~k)の場合、競合する *-a* 付加語 (*scol-a* と *steor-a* は *-ere* 付加語, *wig-a* は *-end* 付加語も競合する)は「人」以外を表すことはない。このことは、*-man* 複合語は *-a* 付加語よりも「人」を明確に

表せた証拠であると言える。したがって、問題は、接尾辞 *-a* が「動作主」を表すとみなされていることにありそうである (Kornexl 2002: 113)。この問題は 2.3.2. 以下で取り上げることにする。次に、動作主を表す *-ere* 付加語 (7 f, h, i) と *-man* 複合語が競合していない 8 例 (7 a~e, g, j, k) について検討してみる。このうち、半数の 4 例 (7 a, b, d, g) では *-man* 複合語は動作主を表していない。したがって、「動作主を表さない *-man* 複合語は *-ere* 付加語と競合しない」という一般化が可能となる。ただし、これとは逆に、「動作主を表す *-man* 複合語は *-ere* 付加語と競合する」とは限らない。なぜなら、現存する古英語の文献は散逸や焼失により消滅したものが少なくないことから、現存の文献に当時用いられていた *-man* 複合語や *-ere* 付加語がすべて含まれているとは限らないからである。最後に、動詞から男性の動作主名詞を派生する *-end* (または *-nd*) を伴う語と *-man* 複合語が競合する唯一の例である (7 k) の *wig-mann* について考察する (Jember 1975: xxiv)。この語は、B & T (1898: 1222) の 'a man of war, a fighting man, soldier' という定義からも明らかなおと、*「戦う人」* という動作主名詞である。以上の分析から、「*-ere*, *-end* 付加語と競合する *-man* 複合語は動作主を表す」という一般化が提案できる。一方、*-a* 付加語と競合する *-man* 複合語は動作主を表すとは限らず、「人」を明示するために複合していると考えられる例がある。なお、*-a* 付加語と競合する *-man* 複合語のもう一つの特徴として、対応する動詞が存在しない例 (*gum-mann*, *lid-man*, *ref-mann*, *scol-mann*, *steor-mann*) が半数近くあることがあげられる。なお、これらの例の意義については、*-ere* 付加語と *-end* 付加語を比較する時に述べることにする。

- (7) a. *dwol-man* 'one who is in error, heretic' (<*dwol* *adj.* 'heretical') ~ *dwol-a m.* 'error, heresy, madman, deceiver, heretic'
- b. *feðe-mann* 'pedestrian, footsoldier' (<*feðe* *n.* 'walking, gait, pace') ~ *feð-a m.* 'footman, foot-soldier, band of foot-soldiers, troop'
- c. *flot-mann* 'sailor, pirate' (<*flot* *n.* 'deep water, sea') ~ *flot-a m.* 'boat, ship, vessel, fleet, sailor, pirate'
- d. *gum-mann* 'man' (< \**gum*) ~ *gum-a m.* 'man, lord, hero'
- e. *lid-man* 'seafarer, sailor, pirate' (<*lid* *n.* 'ship, vessel') ~ *lid-a m.* 'sailor'
- f. *pleg-mann* 'gymnosophist, athlete' (< \**pleg*) ~ *pleg-a m.* 'play, quick motion, movement' ~ *pleg-ere m.* 'player'

- g. *ref-mann* 'official, courtier' (<\*ref) ~ *ref-a m.* 'reeve, high official, steward, sherriff, count, consul'
- h. *scol-mann* 'scholar, client' (<*scol f.* 'school' ~ *scol-a m.* 'fellow-student' ~ *scol-ere m.* 'scholar, learner')
- i. *steor-mann* 'pilot, master of a ship' (<*steor f.* 'steering, direction, guidance') ~ *steor-a m.* 'steersman, pilot, guider, director' ~ *steor-ere m.* 'steersman'
- j. *ðeow-mann* 'servant' (<*ðeow f., m.* 'servant, slave') ~ *ðeow-a m.* 'servant, slave'
- k. *wig-mann* 'warrior' (<*wig n.* 'strife, war, battle, valour') ~ *wig-a m.* 'fighter, man' ~ *wig-end m.* 'warrior, fighter'

### 2.3.2. -man 複合語が-ere 付加語と競合する場合

次に、-man 複合語が -ere 付加語と競合する場合、前節で述べたとおり、-ere は動作主を表すことから、-man 複合語が -ere 付加語と競合するか否かによって、どのような言語特徴が浮かび上がってくるかが焦点となる。考察の対象は (8) の 9 例である。最初に、(8a) については、C&M は 'manservant' という語義のみをあげているが、B & T (1898: 36) はその他に 'servant-woman, attendant, servant, minister' も認めていることから、この語は「男の召使」のみならず、「仕える者」という動作主も表すことが分かる。(8b) の *cristen-mann* については、-ere 付加語の *cristn-ere* 「洗礼を施す者」とは異なり、B & T (1921: 134) も 'a Christian' のみを認めていることから、この語には動作主の意味はないと判断できる。(8c) の *scol-mann* の場合、C&M は 'scholar, client' の語義を与えているが、B & T (1898: 838) は 'one who attends a school, a scholar' と 'one who belongs to a band, a follower, client' の両義を認めていることから、動作主も表すとみなせる。残る 5 例 (8c~g) はいずれも動作主を表すことから、-man 複合語の中で -ere 付加語と競合しないのは (8b) の 1 例だけとなる。ちなみに、(8e) の -a 付加語の *pleg-a* の場合、C&M のみならず B & T (1898: 775) も「人」の語義を認めていないことから、-a 付加語が動作主を表すとは限らない例が一つ加わったことになる。一方、(8c) の *scol-a* の場合、B & T (1898: 838) は動作主の意味 'learner' を挙げている。これらの事実を総合すると、-man 複合語に対応する -ere 付加語が存在する場合、-man 複合語が動作主を表す割合が -a 付加語より高くな

るが、(8b) の *cristen-mann* のように、-man 複合語が動作主以外の「人」を表す例も存在する。さらに、-man 複合語に対応する3例の -a 付加語のうち2例は動作主を表していない。なお、(8c, i) の2例には、対応する動詞が存在しないが、このことは -man 複合語や -a 付加語が動作主を表さないことへと連動していない。

- (8) a. *ambiht-mann* 'manservant' (<*ambiht m.* 'attendant, messenger, officer') ~ *ambiht-ere m.* 'servant'
- b. *cristen-mann* 'a Christian' (<*cristen adj.* 'Christian' ; *m.* 'Christian') ~ *cristn-ere m.* 'one who performs the rites of christening'
- c. *scol-mann* 'scholar, client' (<*scol f.* 'school') ~ *scol-ere m.* 'scholar, learner' cf. *scol-a m.* 'fellow-student'
- d. *mot-mann* 'orator, counsellor' (<*mot n.* 'moot, assembly, court, council') ~ *mot-ere m.* 'public speaker'
- e. *pleg-mann* 'gymnosophist, athlete' (<\**pleg*) ~ *pleg-ere m.* 'player' cf. *pleg-a m.* 'play, quick motion, movement'
- f. *rædes-mann* 'counsellor, adviser, steward' (<*rædes* <*ræd m.* 'advice, counsel') ~ *ræd-ere m.* 'reader, lector, scholar, diviner, expounder, interpreter'
- g. *ripe-mann* 'reaper' (<*ripe adj.* 'ripe, mature' <*rip n.* 'harvest, ripeness') ~ *rip-ere m.* 'reaper'
- h. *scip-mann* 'shipman, sailor, rower, one who goes on trading voyages' (<*scip n.* 'ship') ~ *scip-ere m.* 'shipman, sailor'
- i. *steor-mann* 'pilot, master of a ship' (<*steor f.* 'steering, direction, guidance') ~ *steor-ere m.* 'steersman' cf. *steor-a m.* 'steersman, pilot, guider, director'

### 2.3.3. -man 複合語が -end 付加語と競合する場合

-man 複合語に対応する -end 付加語は(9)の7例がすべてである。2.3.1.で述べたとおり、-end を伴う名詞は動詞から派生し、動作主を表す。事実、(9)の -end 付加語にはすべて対応する動詞が存在し、しかも、-man 複合語はいずれも動作主を表している。これらの語には(9g)の -a 付加語が1例競合しているが、興味深いことに、-ere 付加語が競合する例は1つも見当たらない。このことは、-man 複合語は -end 付加語と競合するが、-ere 付加語とは競合

しないことを意味するが、該当例の絶対数が多くないことから、断定はできない。もっとも、この事実は *-end* 付加語と *-ere* 付加語の競合関係の分析に大きな示唆を与えてくれる。

- (9) a. *gliwing-man* 'mockery, debauchee?' (<*gliw n.* 'glee, pleasure, play, sport, mockery' <\**gliwing*) ~ *gliw-iend m.* 'performer, player' cf. *gliw-ian* 'to make merry, jest, play, sing'
- b. *gliw-man* 'gleeman, minstrel, player, jester, parasite' (<*gliw n.* 'glee, play, mockery') ~ *gliw-iend m.* 'performer, player' cf. *gliw-ian* 'to make merry, jest, play, sing'
- c. *hiere-man* 'retainer, servant, subject, hearer, parishioner' (<\**hiere*) ~ *hier-end m.* 'hearer' cf. *hier-an* 'to hear, listen (to), obey, follow'
- d. *hiring-man* 'subject' (<*hier-ing f.* 'hearing, hearsay') ~ *hier-end m.* 'hearer' cf. *hier-an* 'to hear, listen (to), obey, follow'
- e. *spyre-mann* 'tracker' (<\**spyre*) ~ *spyrig-end m.* 'investigator, inquirer' cf. *spyr-ian* 'to make a track, go, pursue, travel'
- f. *weorc-mann* 'workman' (<*weorc n.* 'work, labour, action, deed') ~ *wyrc-end m.* 'worker, doer' cf. *wyrc-an* 'to work, produce, perform, do'
- g. *wig-mann* 'warrior' (<*wig n.* 'strife, war, battle, valour') ~ *wig-end m.* 'warrior, fighter' cf. *wig-an* 'to fight, make war' cf. *wig-a m.* 'fighter, man'

#### 2.3.4. *-man* 複合語に対応する動詞がある場合

前節において、*-man* 複合語が *-end* 付加語と競合する場合、これらの *-end* 付加語にはすべて対応する動詞があること、および、これらの *-man* 複合語と *-end* 付加語はいずれも動作主を表すことを明らかにした。しかし、該当例が多くないことから、この節では古英語のすべての *-man* 複合語 (108例) を対象に、対応する動詞がある例を抽出し、これらの動詞と *-man* 複合語の関係を動作主という観点から捉えてみたい。最初に、108例の *-man* 複合語に対応する動詞が存在するのは全部で35例 (32.41%) である<sup>11)</sup>。このうちの33例では (10a) のように動作動詞 (action verb) が対応しているが、(10d) の *dwæs-ian* 'to become stupid' と *dwol-ian* 'to be led astray' の2例では動作動詞が対応していない。そして、*-man* 複合語が動作主を表すのは33例中21例であり、他

の12例の -man 複合語は動作主以外の意味を表していると思われる。たとえば、(10b) の læring-man ‘disciple’には læran ‘to teach’という動詞が対応しているが、læring-mæden ‘female pupil’についての B & T (1898: 611) の語釈 (‘a girl who is receiving instruction’) からも明らかなおり、この語は ‘teacher, instructor, guide’ という動作主ではなく、むしろ被動作主 (patient) を表していると考えられる。forð-man と frið-mann にも同様の解釈が成り立つ。一方、(10c) の ceorl-man と cristen-mann にはそれぞれ ceorlian ‘to marry’, cristnian ‘to christen, baptize’ という動詞が対応しているが、これらの複合語は動作主を表していない。cristen-mann の限定語の cristen は名詞に由来し、ceorl-man の限定語の ceorl は対応する動詞とは意味がかけ離れていることから、動作を表すとはみなせない。(10d) の6例については、限定語は形容詞であるとみなすのが妥当であろう。最後に、(10e) の ende-mann の限定語は endian ‘to end, finish, destroy, die, etc.’には意味上対応していないし、この複合語そのものも動作主を表してはいない。このように、-man 複合語に対応する動詞がある場合、35例中33例は動作動詞であるが、-man 複合語が動作主を表すのはこのうちの21例であり、残りの12例では -man 複合語は動作主を表していない。したがって、-man 複合語の限定語に動作動詞が対応していることが -man 複合語が動作主となることの必要条件とはなっていないことが分かる。

- (10) a. bær-mann ‘bearer, porter’ (<\*bær) cf. beran ‘to bear, carry, bring’  
 bed-mann ‘worshipper, priest’ (<bed *n.* ‘prayer, supplication, religious service’) cf. bed-ian ‘to pray, worship’  
 ceap-man ‘chapman, trader’ (<ceap *m.* ‘cattle, purchase, sale, bargain’) cf. ceap-ian ‘to bargain, trade, buy, endeavour to bribe’  
 gliw-man ‘gleeman, minstrel, player, jester, parasite’ (<gliw *n.* ‘glee, play, mockery’) cf. gliw-ian ‘to make merry, jest, play, sing, adorn’  
 ripe-mann ‘reaper’ (<ripe *adj.* ‘ripe, mature’ <rip *n.* ‘harvest, ripeness’) cf. rip-an ‘to reap’
- b. forð-man ‘man of rank’ (<forð *adv.* ‘forth, forwards, onwards’) cf. forð-ian ‘to put forth, contribute, further, advance, carry out, accomplish’  
 frið-mann ‘man under special peace-protection’ (<frið *m., n.* ‘peace,

- security, refuge') cf. *frið-ian* 'to give *frið*, make pæce with, protect, guard, defend'
- læring-mann* 'disciple' (<\**lær-ing*) cf. *lær-an* 'to teach, instruct, guide' cf. *læring-mæden n.* 'female pupil'
- c. *ceorl-man* 'freeman' (<*ceorl m.* 'churl, layman, peasant, noble man') cf. *ceorl-ian* 'to marry (of the woman)'
- cristen-mann* 'a Christian' (<*cristen adj.* 'Christian' ; *m.* 'Christian') cf. *cristn-ian* 'to christen, baptize'
- d. *dwæs-mann* 'fool' (<*dwæs adj.* 'dull, foolish' ; *m.* 'clumsy impostor') cf. *dwæs-ian* 'to become stupid'
- dwol-man* 'one who is in error, heretic' (<*dwol adj.* 'heretical') cf. *dwol-ian* 'to be led astray, err, wander'
- freols-mann* 'freedman' (<*freols m., n.* 'freedom, immunity, festival' ; *adj.* 'free, festive') cf. *freols-ian* 'to deliver, liberate, celebrate'
- freo-mann* 'free-man, freeborn man' (<*freo adj.* 'free, glad, joyful, noble') cf. *freo-gan* 'to free, liberate, love, caress'
- ut-wæpened-mann* 'stranger' (<\**ut-wæpned* cf. *wæpned adj.* 'male' ; *m.* 'male person') cf. *wæpn-ian* 'to arm'
- wæpned-mann* 'male, man' (<*wæpned adj.* 'male' ; *m.* 'male person') cf. *wæpn-ian* 'to arm'
- e. *ende-mann* 'man of the world's final age' (<*ende m.* 'end, conclusion, border, limit, death' cf. *end-ian* 'to end, finish, abolish, destroy, come to an end, die')

次に、対応する動詞がない -man 複合語と動作主との関係について考察したい。すでに明らかにしたとおり、古英語の108例の -man 複合語のうち、35例（すなわち、全体の32.41%）には対応する動詞がある。したがって、対応する動詞がない -man 複合語の方が圧倒的に多い（すなわち、全体の67.59%を占める73例）ことになる<sup>10)</sup>。問題は、73例のうち動作主名詞がどの程度の頻度で用いられているかにある。そこで、以下ではこの点について検討したい。73例の -man 複合語のうち、動作主を表すのは (11a) に示したのを含め39例ある。これに対して、-man 複合語が動作主を表さないのは (11b) ののを含め34例ある。すなわち、半数以上の例において、-man 複合語は動作主を表していることから、対応する動詞（とりわけ、動作動詞）の有無と -man 複合

語が動作主となることの間には因果関係はないと判断できる。このことは、古英語では動作動詞の語根を -man 複合語の限定語として用いたのではないことを示唆している。事実、古英語の動詞は一般に名詞の語幹に派生接尾辞 -(i)an を付加して作られるが、古英語の -man の場合、限定語は動作主を表すか否かを問わず、かなり自由に man と複合していることになる。

- (11) a. *æcer-mann* 'acreman, farmer' (<*æcer m.* 'field, cultivated land')  
*lid-man* 'seafarer, sailor, pirate' (<*lid n.* 'ship, vessel') cf. *lid-a m.*  
 'sailor'  
*mæd-mann* 'mower' (<*mæd f.* 'mead, pasture')  
*scegð-mann* 'sailor, pirate, viking' (<*scegð m., f.* 'vessel, ship') cf.  
 ON *skeið*  
*weard-mann* 'watchman, guard, patrol' (<*weard f., m.* 'ward, watch-  
 ing, protection'; *m.* 'keeper, watchman, guard, guardian')  
 b. *burh-mann* 'citizen' (<*burg f.* 'borough, walled town, fort, castle')  
*healf-mann* 'half-man' (<*healf adj.* 'half'; *f.* 'half, side, part')  
*mæg-mann* 'clansman' (<*mæg m.* 'male kinsman, parent, son,  
 brother'; *f.* 'female relation, wife, woman')  
*sot-man* 'foolish man' (<*sott adj.* 'foolish, dull, stupid'; *m.* 'fool, dull-  
 ard')  
*woruld-man* 'human being, man of the world, layman' (<*woruld f.*  
 'world, age, men, humanity, life')

## むすび

古英語の -man 複合語の場合、第一構成素となっている限定語の3分の2以上には対応する動詞はないが、この限定語が man と複合すると、-man 複合語の半数以上は動作主を表す。一方、対応する動詞がある限定語の場合、この限定語が man と複合すると、-man 複合語の約3分の2が動作主を表す。したがって、古英語の -man 複合語の半数以上が動作主を表すことになるが、-man 複合語の形成には限定語に対応する動作動詞の存在は必ずしも前提とはなっていないことが分かる。古英語の動作主を表す4種類の語、すなわち、-a, -ere, -end 付加語と -man 複合語がすべて競合する例は1つもないが、このことは -ere と -end 付加語が動作主を表すのに対して、-a 付加語と -man 複合語には



動作主を表さない場合がかなりあることに起因していると思われる。

### 注

- 1) 古英語では *man-hata* ‘man-hater’, *man-slege* ‘manslaughter’, *man-weorod* ‘collection of men, troop’ のように *man-*を第一構成素とする複合語も用いられていることから、この種の複合語と区別するために、本稿では *man* を主要部語とする複合語を *-man* 複合語と呼ぶことにする。
- 2) 「生産的」(productive) というのは、ここでは「たえず新しい言語表現が生み出され、用いられる」ことを指す (Bussmann 1996: 384)。
- 3) これはあくまでも Clark Hall & Meritt (1966) の *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* に収録されている *-man* 複合語の数であり、Bosworth & Toller (1898, 1921) の *An Anglo-Saxon Dictionary* にはこれより若干多い例が含まれているものと思われる。古英語の場合、散逸や焼失により消滅した文献が少なくないことから、実際にはもっと多くの *-man* 複合語が用いられていたものと思われる。一方、現代英語の *-man* 複合語の数は小学館『プログレッシブ 英語逆引き辞典』(1999) に基づくが、この中には、*sandwich man* 「サンドイッチマン」のように分かち書きされた語と *ape-man* 「猿人」のようにハイフンでつながれた語 (214例)、*merchantman* 「商船」のような「～船」を表す語 (5例)、および *House-*のような「姓」を表す語 (52例) は含まれていない。したがって、2語が完全に1語となっている499例は複合語として最も成熟度が高いと思われる。ちなみに、古英語に由来する20語はいずれも現代英語で完全に複合化していると思われる499例の中に含まれていて、ハイフンでつながれたり、分かち書きされている語の中には一例も見出せない。このことは英語の複合語の形成過程(すなわち、「分かち書き」>「ハイフン連結」>「合体」)について検討する場合の参考になりそうである。
- 4) この20例は以下に示すとおりである。

*alderman* (<OE *ealdor-mann*), *almsman* (<OE *æelmes-mann*), *chapman* (<OE *ceap-man*), *Englishman* (<OE *Englisc-man*), *foeman* (<OE *fah-mann*), *freeman* (<OE *freo-mann*), *freedman* (<OE *freet-mann*), *gleeman* (<OE *gliw-man*), *headman* (<OE *heafod-mann*), *herd(s)man* (<OE *hierde-man*), *kinsman* (<OE *cyne-mann*), *merman* (<OE *mere-menn(en)*), *Northman* (<OE *Norðmann*), *schoolman* (<OE *scol-mann*), *seaman* (<OE *sæ-mann*), *shipman* (<OE *scip-mann*), *sokeman* (<OE *socn-man*), *steersman* (<OE *steor-mann*), *workman* (<OE *weorc-mann*), *woman* (<OE *wif-mann*)

ちなみに、古英語の *æsc-mann* ‘sailor’ はそのまま通時的に変化すると、現代英語では *ashman* となるが、これと同形の *ashman* は「清掃人」の意味で、17世紀初頭に作られたものである (*RHDEL*)。古英語の *æsc* は *ash* 「トネリコ材」であり、「灰」ではない。同様に、現代英語の *anchorman* 「(スポーツの) アンカー」は古英語の *ancor-man* ‘man in charge of the anchor’ から派生したものではない。また、*footman* 「召使」も古英語の *feðe-mann* ‘pedestrian, footsoldier’ とは

別語である。landman (<OE land-mann) は古英語では「(ある土地の) 住人」を意味し、現代語の land(s)man 「(海上ではなく) 陸上の生活者」とは起源を異にする。したがって、これらの5例は上記の20例には含まれていない。一方、古英語の名詞 un-mann 'monster, wicked man, hero' に形態上対応する現代英語の un-man は動詞であり、意味が全く異なること、un- は接頭辞であり、独立語ではないことから、-man 複合語には含めない。

- 5) 母音の長短の区別は本稿では議論の内容に関わらないことから、長音符は省く。
- 6) 以下、頭韻に関与する子音字は肉太の活字で表す。声門閉鎖音の頭韻例は便宜上、後続の強勢母音字を肉太にして示す。
- 7) 古英詩で用いられていない限定語は *æwda*, *carl*, *dryht-earldor*, *heah-ealdor*, *lad-rinc*, *sot*, *ðening*, *ðusend-ealdor* の8例である。
- 8) 本稿では「複合」と「接辞付加」という語形成方法は最も重要な課題となっていることから、語幹や語根の境界はハイフンで示し、語の構成が分かりやすくした。
- 9) (5 b) は、音節分解という伝統的韻律論の便法を *fela* に適用した場合、(5 a, c) と同等に扱える。
- 10) その他の4例は *dwæs* 'foolish, clumsy impostor', *hago-steald* 'unmarried, bachelor', *sot* 'foolish, fool', *wæpned* 'male, male person' である。
- 11) 35例をすべて次に示す。

*ambiht-mann* 'manservant' (<*ambiht m.* 'attendant, messenger, officer') cf. *ambiht-(i)an* 'to minister, serve'

*bær-mann* 'bearer, porter' (<\**bær*) cf. *beran* 'to bear, carry, bring'

*bed-mann* 'worshipper, priest' (<*bed n.* 'prayer, supplication, religious service') cf. *bed-ian* 'to pray, worship'

*ceap-man* 'chapman, trader' (<*ceap m.* 'cattle, purchase, sale, bargain') cf. *ceap-ian* 'to bargain, trade, buy, endeavour to bribe'

*ceorl-man* 'freeman' (<*ceorl m.* 'churl, layman, peasant, noble man') cf. *ceorl-ian* 'to marry (of the woman)'

*cristen-mann* 'a Christian' (<*cristen adj.* 'Christian'; *m.* 'Christian') cf. *cristn-ian* 'to christen, baptize'

*dwæs-mann* 'fool' (<*dwæs adj.* 'dull, foolish'; *m.* 'clumsy impostor') cf. *dwæs-ian* 'to become stupid'

*dwol-man* 'one who is in error, heretic' (<*dwol adj.* 'heretical') cf. *dwol-ian* 'to be led astray, err, wander'

*ende-mann* 'man of the world's final age' (<*ende m.* 'end, conclusion, border, limit, death') cf. *end-ian* 'to end, finish, abolish, destroy, come to an end, die'

*feðe-gann* 'pedestrian, foot-soldier' (<*feðe n.* 'walking, gait, pace') cf. *feð-an* 'to go on foot?'

*flot-mann* 'sailor, pirate' (<*flot n.* 'deep water, sea') cf. *flot-ian* 'to float'

*forð-man* 'man of rank' (<*forð adv.* 'forth, forwards, onwards') cf. *forð-ian* 'to put forth, contribute, further, advance, carry out, accomplish'

- freols-mann 'freedman' (<freols *m., n.* 'freedom, immunity, festival' ; *adj.* 'free, festive' ) cf. freols-ian 'to deliver, liberate, celebrate'  
 freo-mann 'free-man, freeborn man' (<freo *adj.* 'free, glad, joyful, noble' ) cf. freo-gan 'to free, liberate, love, caress'  
 friðmann 'man under special peace-protection' (<frið *m., n.* 'peace, security, refuge' ) cf. frið-ian 'to give *frið*, make peace with, protect, guard, defend'  
 fyrð-mann 'warrior' (<fyrð=*fierð f.* 'national levy or army, military expedition' ) cf. fyrð-ian 'to go on an expedition'  
 gliwing-man 'mockery, debauchee' (<\*gliwing <gliw *n.* 'glee, pleasure, play, sport, mockery' ) cf. gliw-ian 'to make merry, jest, play, sing, adorn'  
 gliw-man 'gleeman, minstrel, player, jester, parasite' (<gliw *n.* 'glee, play, mockery' ) cf. gliw-ian 'to make merry, jest, play, sing, adorn'  
 hiere-man 'retainer, servant, hearer' (<\*hiere) cf. hier-an 'to hear, listen (to), obey, follow, be subject to'  
 hiering-man 'subject' (<hier-ing *f.* 'hearing, hearsay' ) cf. hier-an 'to hear, listen (to), obey, follow'  
 læring-mann 'disciple' (<\*lær-ing) cf. lær-an 'to teach, instruct, guide' cf. læring-mæden *n.* 'female pupil'  
 lah-mann 'an official declarer of the law' (<lah=*lagu f.* 'law, ordinance, rule, regulation' ) cf. lag-ian 'to ordain' cf. lah-wit-a *m.* 'lawyer'  
 mot-mann 'orator, counsellor' (<mot *n.* 'moot, assembly, court, council' ) cf. mot-ian 'to speak to or about, converse with, address, discuss'  
 pleg-mann 'gymnosophist, athlete' (<\*pleg) cf. pleg-an 'to move rapidly, exercise, fight, play'  
 rædes-mann 'counsellor, adviser, steward' (<rædes <ræd *m.* 'advice, counsel' ) cf. ræd-an 'to advise, consult, read'  
 ripe-mann 'reaper' (<ripe *adj.* 'ripe, mature' <rip *n.* 'harvest, ripeness' ) cf. rip-an 'to reap'  
 scip-mann 'shipman, sailor, rower' (<scip *n.* 'ship' ) cf. scip-ian 'to take ship, embark' ; 'to man or equip a ship'  
 spyre-mann 'tracker' (<\*spyre) cf. spyr-ian 'to make a track, go, pursue, travel'  
 ðening-mann 'serving-man' (<ðening <ðegn *m.* 'servant, minister, follower' ) cf. ðegn-ian 'to serve, minister, wait on'  
 ðeow-mann 'servant' (<ðeow *f., m.* 'servant, slave' ) cf. ðeow-ian 'to serve, be subject to, enslave'  
 ut-wæpened-mann 'stranger' (<\*ut-wæpned cf. wæpned *adj.* 'male' ; *m.* 'male person' ) cf. wæpn-ian 'to arm'  
 wæpned-mann 'male, man' (<wæpned *adj.* 'male' ; *m.* 'male person' ) cf. wæpn-ian 'to arm'  
 weard-mann 'watchman, guard, patrol' (<weard *f., m.* 'ward, watching, protection' ; *m.* 'keeper, watchman, guard, guardian' ) cf. weard-ian 'to

watch, guard, keep'

weorc-mann 'workman' (<weorc *n.* 'work, labour, action, deed') cf. wyrc-an 'to work, produce, perform, do'

wig-mann 'warrior' (<wig *n.* 'strife, war, battle, valour') cf. wig-an 'to fight, make war'

- 12) -man 複合語に対応する動詞が現存する文献にたまたま用いられていない可能性は否定できないが、これとは逆に、-man 複合語が用いられている文献またはその一部が消失していて、対応していたと思われる動詞が記された文献が現存する場合も想定できることから、両者を相殺して、本稿では考慮の対象外とする。

### 参考文献

- 荒木一雄, 安井稔. (編) 1992. 『現代英文法辞典』東京: 三省堂.
- Bessinger, J. B., and Philip H. Smith. (eds.) 1978. *A Concordance to The Anglo-Saxon Poetic Records*. Ithaca & London: Cornell University Press.
- Bosworth, Joseph, T. Northcote Toller, and Alistair Campbell. (eds.) 1898, 1921. *An Anglo-Saxon Dictionary*. 2 vols. London: Oxford University Press.
- Bussmann, Hadumod. (ed.) 1996. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. London & New York: Routledge.
- Clark Hall, John R., and Herbert D. Meritt. (eds.) 1966. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. London: Cambridge University Press.
- Holthausen, F. (ed.) 1963. *Altenglisches Etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- Jember, Gregory K. (ed.) *English-Old English, Old English-English Dictionary*. Colorado: Westview Press.
- Klaeber, Frederick Friedrich. (ed.) 1950. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Boston: Heath.
- Kornexl, Lucia. 2002. 'From *gold-gifa* to *chimney sweep*?' In *English Historical Syntax and Morphology*. Ed. by Tereso Fanego, et. al. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Krapp, George Philip, and Elliot Van Kirk Dobbie. (eds.) 1936. *The Anglo-Saxon Poetic Records*. Vol. 3. New York: Columbia University Press.
- 國廣哲弥, 堀内克明. (編) 1999. 『プログレッシブ 英語逆引き辞典』東京: 小学館.
- Marchand, Hans. 1969. *The Categories and Types of Present-day English Word-formation*. München: C.H.Beck.
- Simpson, John A., and Edmund S.C.Weiner. (eds.) 1989. (2nd ed.) *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.